

【課題研究報告】

課題研究Ⅰ 教師の指導力を高める社会科授業評価

(2011年2月20日開催)

服 部 一 秀
(山梨大学)

1. 課題研究の趣旨

教師の社会科指導力を高め、日々の授業実践をよりよく改めていくための一つの突破口として、授業評価の在り方が問われている。授業の在り様を省みさせてくれるとともに、よりよい授業づくりの手がかりを与えてくれるもの、また、実際に行いうるものへ、社会科授業評価を改善しなければならない。社会科における授業評価では、授業の何をいかなる視点で取り扱う必要があり、誰が、いつ、どのような方法で評価するとよいか。そのような授業評価の在り方は本当に実行可能なものか。それはいかなる指導力の向上につながり、社会科授業をどのように変えることができるか。本課題研究は、これらを問い、社会科授業評価の新たな可能性を検討するため、企画された。

発表者は、山内敏男氏（豊川市立小坂井中学校）、田口絃子氏（鹿児島大学）、峯明秀氏（大阪教育大学）である。指定討論者は、吉村功太郎氏（宮崎大学）である。司会は、コーディネーターの服部がつとめた。

2. 各発表者の提案

山内氏の発表は「授業仮説の明示とその検証による授業改善－教職大学院における授業実践と授業評価」である。兵庫教育大学教職大学院の教育実践研究開発プロジェクト実習における自らの授業評価の取り組みに基づき、授業仮説の明示と検証について提案するものである。田口氏の発表は「授業者主体の授業研究の実現をめざす小学校社会科授業についての事例研究－『授業研究支援シート：小学校社会科編』の開発と検証を通して」である。鹿児島大学における教員研修モデルカリキュラムの開発の一環において氏らが開発・検証した「授業研究支援シート」の活用について提案する

ものである。峯氏の発表は「社会科授業改善研究の方法論の研究－メタ・レッシンスタディのアプローチ」である。「各々の授業観に応じたPDCA」とその限界を乗り越える「螺旋PDCA」による社会科授業改善の具体的方法論として、レッシンスタディについて提案するものである。

3氏の提案は何れも、授業検討会における集団的な授業評価の内実を改めることをねらっている。授業検討会は授業評価のための機会として広く普及しているけれども、多くの場合、機能せず、形式化形骸化している。その原因を3提案は、それぞれの授業参観者が授業者の社会科授業観と無関係に各々の相異なる社会科授業観から意見を述べあうに留まることととらえる。評価に向けての共通認識が確保されないために焦点が定まらず、授業者も授業参観者も自らの授業を改善する手がかりを得られず、授業検討会に意味を見出せなくなっているとみる。各提案はこの問題状況を克服するために授業者の社会科授業観に基づく評価を重んじ、授業検討会を授業評価として機能化活性化させることをめざそうとする。尤も、山内提案は授業者の社会科授業観に基づく授業の改善に限定しようとし、田口提案と峯提案はさらに社会科授業観の改善までを射程に入れようとしている。

山内提案は、一定の社会科授業観に基づき、それを前提にして授業仮説を示したり検証したりし、理論と実践を反復的に検討することをねらう。同提案では、「授業目標（習得される知識内容）＋手だて（具体的方法、手順、指導内容）＋目的（目指す生徒像）」を授業仮説と呼ぶ。授業仮説の明示と授業の事実による検証により、研究的な授業づくりを図る。それは「自分自身の研究課題に即した理論の習得・開発」→「理論を具現化した指導案の作成、授業仮説の明示」→「事後検討会、

ゼミにおける検証、評価」→「成果と課題の抽出、改善案の作成」という過程をなす。授業検討会をこの一連の過程に位置づけなおすことで機能させることをめざす。氏自らが「概念探究・価値分析型」の社会科授業観に基づいて取り組んだ一連の取り組みにより、授業後の検討が焦点化され、成果と課題を取りだしやすくなること、授業仮説が複雑な構成となりかねないので提示の仕方が課題となることが明らかになったという。

授業者の社会科授業観に基づく授業の改善に限定する山内提案に対し、社会科授業観の改善まで射程に入れるのが田口提案と峯提案である。田口提案と峯提案の大きな違いは、授業者の社会科授業観の違いによらず評価項目を予め用意し共通化するか、授業者の社会科授業観を踏まえて参加者自身が評価項目をうみだすかの相違にある。

田口提案の中核は、「授業研究支援シート」の活用である。このシートでは授業者が授業前に記入する「社会科観」に関する項目とともに、授業参観者が授業後に記入する「授業の実際」に関する項目が設定されている。参観者は事前に授業者によって記入された「社会科観」の各項目を把握する。参観後に教材・資料をはじめとする「授業の実際」の各項目に評価とその理由を記入する。それらの記入内容と「社会科観」の記入内容を関係づけて検討を行う。これらを踏まえての授業検討会により、「授業者の社会科観をよりよく実現する改善策の提案や授業者の社会科観の変革」をねらう。項目の設定により、授業者・参観者が社会科授業の見方考え方に気づく学習効果もねらう。計4回の授業検討会による検証によれば、授業者の「社会科観」について把握し共有しやすくなること、授業の検討において何をいかなる視点で述べているかがわかりやすくなることなどが明らかになったという。項目の理解や記入に慣れが必要であること、「社会科観」と「授業の実際」の結びつけが容易でないこと、検討会の司会役に力量が必要であることも確認され、支援シートの活用マニュアルの作成が今後の課題という。

峯提案は、米国などで展開されているレッスンスタディの方法論を参考にしている。授業評価のための取り組みを授業前から始動し、授業者と授

業参観者が事前に授業の目的・内容・方法について共有すること、それらに関して何をどのように見取るのかを各々が自覚したうえで研究授業に臨むことをねらう。「授業観」に従って授業者・参観者が設定した評価項目に基づく各々の観察結果により、計画と実践の不一致や齟齬、学習者の学習成果、問題点などをとらえて授業改善のために検討することをねらう。教師がレッスンスタディを遂行し省みるなかで自分たちで評価項目をつくり、つくりかえつつ、社会科の授業を改善したり「授業観」を改善したりする取り組みとして、授業評価を「PDCA」や「螺旋PDCA」の遂行に位置づけることを構想する。同一の小学校社会科授業に関する一般的形態での授業検討会と氏自らが司会役をつとめたレッスンスタディとの対比も踏まえ、研究者と実践者の協働、グループや学校での組織的な取り組みなどが必要としている。

3. 課題研究のまとめ

このように山内提案・田口提案・峯提案は、授業評価の射程や方法において異なっている。そのような3提案について、社会科の授業評価としての射程や方法の妥当性、実行上の鍵的要件や具体的手法、現実的な実行可能性などをめぐり、指定討論者とフロアを交えた討論が行われた。

最後に、指定討論者の吉村氏は、本課題研究のまとめとして、社会科授業評価のための今後の検討課題を提示した。①授業の事実を確定するための記録をどのようにとり、どのように表記するか、それは社会科授業観によって異なるのか否か、②個々の授業の評価から授業力の向上につながる理論化を行うためにどうすればよいか、③授業評価において1時間の授業そのものの改善と社会科授業観の改善を分けて検討するか、それとも一体的に検討するか、④社会系教科固有の授業評価は必要か、また可能か、という4点である。

社会科授業の改善のため、社会科授業評価の改善が求められている。本課題研究が一つの足がかりとされ、社会科授業評価の新たな在り方の追求がさらにすすめられていく必要があろう。

本課題研究の発表者と指定討論者、そして多くの参加者の方々に感謝申し上げます。